

玉樹真一郎 元八戸学院大学

僕は18才で八戸を出て、33才で戻ってきて、今は45才。なぜ18才の僕は八戸を出たかったのか？物心がついたころから、外の世界にあこがれていたからです。

テレビの向こう。ヘリコプターから見下ろすキラキラの摩天楼。文化人と言われる人たちの小粋なトーク。肩パットが妙に大きいスーツを着た大人たちが、シンセサイザーの音が目立つ曲で踊っている80・90年代東京のハイテンション。生まれてからずっと八戸に暮らしていた僕にとって、まさに衝撃的。

東京には、八戸とはちがう風が吹いている。

一方、八戸で暮らす僕は、青春時代にありがちな悩みを抱えながら八戸のまちを歩いていました。僕の人生はこれからどうなっていくんだろう、ずっと八戸で暮らすのだろうか？僕はきつしあわせになるはずだけど、本当だろうか？そんな不安や希望を、何年も着て太ももやひじのところがテカテカになった学生服で隠す毎日。

いや、もっと正直に言うと。当時の僕にとっての八戸は、まるで吹き溜まり。生まれてこの方やかしてきた失敗、悲しみ、カッコ悪さ…そんな匂いが充満していて、街を歩くだけで頭をよぎってしまったものでした。

だからこそ、八戸を離れたいと思いました。八戸にいと、ダメな自分ばかり思い出してしまうから。

しかし、年をとった今となっては、そんな風に屈折した八戸に対する気持ちもほぼ消えました。情けない僕の過去も、今はなんとか許せます。

それでも時々、あの頃の屈折した僕が顔を出す時があります。たとえば八戸ブックセンターさんに行くたびに、ちょっと心がねじれます。なんでこんなにおしゃれで、知的で、八戸らしくないんだろう？こんなにステキな場所の空気を、もし一口でも吸うことができたなら、子どもの頃の僕はさぞ救われただろうに。

しあわせな気分でも本を物色していても、本棚のスキマから視線を感じたりします。子どもの頃のみじめな自分が、恨めしそうにこっちを覗いているんです。そんな時は、ちょっとのあいだ目を閉じて、過ぎてしまった長い時間のことを考えます。まるで子どもの頃の僕を供養するように。

もし、いま八戸に、子どものころの僕のような気分の人がいるとしたら、別に本を買わなくてもいいから、ただ八戸ブックセンターに来てもらえたらと思います。ただ外の世界の空気を感じるだけで良いですから。

†

早朝、朝市のにぎわいを見下ろす夢の大橋には、「八戸は海から拓く」ということばが刻まれています。かつて海こそが、八戸を外の世界につないでくれました。やませの向こうで、八戸は世界とつながっている。ちょっとやませが匂っても嫌な気分にならないのは、海から拓けた街・八戸のことが誇らしく感じられるからでしょう。

もしかしたら、八戸ブックセンターさんは、八戸にとっての海と同じ役割を担ってくれているのかも知れません。八戸を拓く、八戸を外の世界につないでくれる場所。都会的で文化的で、少なくとも日常とはちがう空気を感じさせてくれる場所。海からやませが吹いてくるように、八戸ブックセンターさんからは「文化的やませ」とでも表現したくなる目に見えない風が噴き出していて、八戸で暮らす私たちの鼻先をかすめては、八戸は外につながっているんだよ、吹き溜まりなんかじゃないよと教えてくれます。

きっとそんな匂いに当てられた僕は、八戸ブックセンターさんのカンヅメブースで本を書きはじめ、『「ついやってしまう」体験のつくりかた』（ダイヤモンド社）を上梓することができたのだと思います。

まったく社交性の無いネクラな僕がたくさんの人に声をかけて、協賛金を集めて、東京からゲストを呼んで、トークイベント『なんかスゴイ人が八戸に来ちゃうので本とか仕事とかのことを訊くイベントしなきゃもったいないぞ2019』を開催することが出来たのも、きっと文化的やませの匂いの成せる技。

かつて八戸を海から拓いたように、いま八戸を街から拓く。外の世界の匂いがする文化的やませの噴出口として、八戸ブックセンターさんに心から期待していますし、ささやかながら僕も力になれたらと思います。何せ、子どもの頃の僕が恨めしそうに見えていますから。

**玉樹真一郎** shinichiro tamaki

元八戸学院大学

八戸市民作家第1号

パワープッシュ作品『「ついやってしまう」体験の  
つくりかた』刊行記念イベント(2019)など

1977年八戸市出身。プログラマーとして任天堂に就職後、プランナーに転身。2010年に八戸市にUターンし独立、「わかる事務所」を設立。2014～2022年に八戸学院大学地域経営学部特任教授も務める。著書に『コンセプトのつくりかた』(ダイヤモンド社)など。

